

今年から選考方法が大きく変わった。佳作入選歴のないかたも選考対象となり、奨学生として選出されることになった。そうなると、なぜ月次のほうにはその作品が入らなかったのだろうか、と選者としてはいったん立ち止まって考えることになる。そして、あらためて襟を正し、「僅差」という概念について思うにいたった。

批評眼の変化もあるかもしれないが、もっと本質的なことに触れれば、作品の優劣の差は、どんなに大きく見えても、それに関わる者が人間というやわらかな者である限り、僅差なのだ、ということをお忘れしないでください。絶対という明確なものはない、という未固定のゆらぎのようなものが、結果的には、書き手を生かすことになる。何かを選ぶ者はそのみずからの選によって何かから選ばれる者となるから、これは投稿者のみならず、選者にとってもいえることだ。

なお、作品を人間から孤立させないように読んでいきたいとも思っている（もちろん、作品を作者の一つの人生の上に並べてノンフィクションとして読む、という単純な話ではまったくない）。

入選作品はどれも素晴らしいが、福山ろかさんの「紋白蝶エラーのように雨のなかを」の「エラー」に魅せられた。「エラー」のここまで美しい使用例はなかなか見ない。以下、とりわけ印象に残ったものを挙げたい。

福山ろか 紋白蝶エラーのように雨のなかを

松下 誠一 水仙になってもいいですか疲れた

さいう かーてんの／裏で／ふくらむ秋の陽の／焦げたバターのようなしきさい

高田皓輔 なしくずし的に川面を見わたせば／わたしがわたしになって久しい

雲理そら 堂々と水飲む よわい花のまま

波野 梅雨 サンデー／ 保湿クリームを塗る日／ サンデー

汐見りら 神様は去っていく速さでわかる／針金みたいな三つ編みだった

マズルカ 「俺」と言う奴らが放つ／「わたくし」の／柔らかさのみ詰め込んだ部屋

早瀬はづき 塩と嘘かがやく夜半に蓄音機／百合のかたちの口をかかけて

なお、今回は残念ながら選外となったが、次の方々の作品も私は面白いと思った。畔上透さんの怒りの感情の捉え方などとても新鮮だ。今後の活躍をおおいに期待している。

狛犬 吠 埋められた人の気持ちで真っ暗な／部屋を動いて飲みに行く水

橋口 諒介 キリストが試着室に／入ってくところ見ちゃって／マジで最悪

辻村陽翔 3年で最大級の大雨よ／降れ、この別れを嘘にするため

畔上透 あざやかで／とげとげしてるものがすき／すべてすてたい、／おまえがきらいり
e びつくりした／／自分の中に／自分しかいなかった／ファンヒーターの音さえ